

# 英語と日本語の「態」について

宗宮 喜代子

(東京外国語大学外国語学部教授)

## 序

本稿では、英語と日本語の性質について理解を深めるために、2 言語における「態」の現象を観察する。一般的に、英語の受動態は有標構文であると言われる。そこで本稿では、まず「有標性」の概念を明確にすることから出発し、次の順序で考察する。

1. 有標性とは何か：プラーグ学派・意味論・類型論の捉え方
2. 態とは何か：3 つの立場の比較と本稿の見解
3. 英語受動態：どういう意味で有標か
4. 日本語の態：受動態の諸相と「尊敬態」

全体として、1 と 2 で方法論を模索し、これに基づいて 3 と 4 で独自の提案をする。

## 1. 有標性とは何か

### プラーグ学派音韻論

「有標性 (markedness)」の用語はプラーグ学派音韻論に由来する。以下の 5 段落では、音韻論に関する事実をハイマン (Hyman 1975) に依拠しながら有標性について観察する。

トゥルベツコイ (Trubetzkoy 1939) は、音韻対立に関して中和 (neutralization) の現象があり、その際には対立する要素のうち決まって一方が実現することに注目した。例えばドイツ語の /t/ と /d/ は、語頭で Tier[ti:ɐ] (動物), dir[di:ɐ] (2 人称与格), 語中で Räte[rɛ:tə] (忠告・複数形), Räder[rɛ:dər] (車輪・複数形) として無声・有声の対立をなすが、語末では Rat[ra:t] (忠告・単数形), Rad[ra:t] (車輪・単数形) として対立が中和される。ドイツ語では規則的に、音節の末尾で無声と有声の対立が中和する。この時に、無声の /p, t, k, f, s/ は無標 (unmarked) で、有声の /b, d, g, v, z/ に代わって用いられる。後者は有標 (marked) ということになる。(Hyman: 29)

ここで筆者としては、まず 2 項対立の考えが背後にあり、そこから無標性が発見され、その対比概念として有標性が登場した、ということに注目したい。

中和と有標性は本来別個の現象である。例えば英語で、母音間で /t/ と /d/ の対立が betting[bɛtɪŋ], bedding[bɛdɪŋ] として中和を呈する場合に、[ɹ] は /t/ と /d/ の異音であり

(Hyman: 69), 有標・無標を云々するのは当たらない。しかしプラーグ学派では無標性は中和があってこそその現象であると考えられていた。中和は個別言語内の特定の文脈で見られる現象であり、従って有標性も個別言語内の音韻的現実として位置づけられていた。

その後、有標性の概念は音韻論の内部でさまざまに解釈されるようになったが、1960年代末以来の生成音韻論で特に大きく変容した。生成音韻論は、ヤコブソン (Jakobson 1968) が提唱した「(音韻対立の) 不可逆性の原則 (the general laws of irreversible solidarity)」を援用して、言語音の間には普遍的で生得的な知識としての無標性の度合いがあると主張した。例えば、無声閉鎖音は有声閉鎖音、無声摩擦音などより無標の度合いが大きい。この主張は、言語獲得における普遍性の研究、類型論、言語変化の研究から支持された。つまり、子供は無標の音素ほど早期に獲得し、世界の言語の音韻体系を見ても、有標の音素をもつ体系は必ず無標の音素をも備えている。言語変化のデータからは、文脈自由に有標音が無標音に変化し、逆に文脈依存的には無標音が有標音に変化することが証言された。(Hyman:146-7)

こうして無標性(有標性)に度合いと普遍性が導入された時、無標性の概念は大きく変容した。しかし音素獲得自体にはヤコブソン以来の2項対立が想定されている。また、有標性が文脈に依存する現象であるという考えも継承されている。

## 語彙意味論

一方、構造主義の伝統内にあった語彙意味論では、「有標性」の援用にあたってプラーグ学派の中和の概念や、西欧思想の伝統である2項対立の考えがかなり忠実に守られた。以下の4段落ではライアンズ (Lyons 1977)、クルーズ (Cruse 1986) に依拠しながら意味論における有標性を観察する。

語彙体系にも中和の現象が存在する。例えば doctor/dentist の対立は反対概念である patient において中和されているし、murderer/mugger の対立は victim において中和している (Cruse:256)。ここでクルーズ自身は言及していないが、doctor/dentist では doctor が無標、murderer/mugger では murderer が無標ということになる。

別の種類の中和もある。例えば dog<sub>1</sub> (犬) は、dog<sub>2</sub> (オス犬) と bitch (メス犬) の上位語であると同時に、dog<sub>2</sub> の同列語である。lion<sub>1</sub> (ライオン) は lion<sub>2</sub> (オスライオン) と lioness (メスライオン) の上位語であると同時に lion<sub>2</sub> の同列語でもある。このように、上位語において下義語の対立が中和されていると同時にその上位語が下義語としても現れる時、その語は無標である。long/short の組でも、How long is it? という疑問文から long が short の同列語であると同時に上位語であって無標であることが分かる。これに対して bitch, lioness, short は有標である。つまり有標性は下義語が2つである場合に限定される。例えば、animal (動物) は animal, bird, fish, insect などの上位語であると同時に、これらと並ぶ同列下義語でもある。この場合、有標・無標を云々するのは当たらない。(Cruse: 255-57)

dog や lion の例はプラーグ学派のドイツ語の /t/ の例に対応する。意味論の方が「文脈」の確定にやや困難を伴うことが多いが、有標性が文脈と不分離であること、2項対立を原則とすること、さらに語彙体系が個別言語によって異なることから有標性の現れ方も個別

言語によって異なることが、ここで再び主張された。特に、下義語が3つ以上ある *animal* などの場合に、下義語 *animal* は無標と呼ばれるが、その他の下義語が特に有標とは呼ばれることはないことが明言された。

では有標の音素が通常プラスの弁別素性をもっていたように、有標の語も付加的な意味を持っているのだろうか。*host-hostess*, *count-countess*, *lion-lioness* の例は、形式の長さが意味の多さを示しており、答えがイエスであることを含意する。*useful-useless*, (さらに *boy-girl*) のような例外もあるが、有標の語は「+ $\alpha$  (プラスアルファ)」の意味をもつことが多い。だからこそ文脈を選ぶ。無標の音素と語が、使用の頻度が高く、幅広い分布を示すのと対照的である。これを踏まえてライアンズは、有標性を決定するのは形態でも分布の制限でもなく意味の特定性であるとして、この基準を意味標示 (*semantic marking*) と呼んでいる (Lyons: 305-7)。

本稿では、ライアンズのように意味に有標性の基準を求めることは曖昧である上に、循環論に陥りやすいと考える。統語的な基準で意味的な有標性を捉えるべきである。

### 構文の意味論

さて、語の有標性は構文の有標性につながる。現代の認知言語学ではあらゆる言語単位が区別なく「構文」と呼ばれる。受動態が能動態に対して有標である、とは一般的に言われることだが、有標の受動文の中でさらに、*be* 受動文が *get* 受動文に対して無標である (Dixon: 306) と考えるのもごく自然なことに思える。ダウティ (Dowty 1991: 565) から例を引用しよう。トラックが暴走し、このままでは木にぶつかるかもしれない、という状況を目撃した人が、あとで別の人に *What happened to the truck?* (トラックはどうなりましたか) と尋ねた。これに対する答えとしては *It hit the tree.* が正しく、*The tree was hit by it.* は通常許されない。しかし同じ人が *What happened to the tree?* (木はどうなりましたか) と尋ねた場合は、*It was hit by the truck.* と *The truck hit it.* の両方が容認可能である。木の方をトピックに選ぶことが期待される文脈でトピックが中和され、能動態が無標であることが示された形だ。

語の意味論での発見と並行して、より大きな構文においても無標の構文は形態的に単純である。加えて、使用頻度が高い。コムリー (Comrie 1988:19-20) も指摘するように、自動詞が用いられる文脈を除外しても、能動態は受動態よりはるかに頻繁に用いられる。さらにコムリーは、形態の単純さと使用頻度に加えて能動態の生産性の高さで分布 (*discourse distribution*) の広さを指摘する。ほとんどの動詞は能動態をもつが、受動形態をもたない動詞つまり受動態で用いられない動詞も多い。手近な例ではすべての自動詞がこれに該当する。しかし、その逆つまり受動態があつて能動態が無い動詞は、*be said to* の類を除いて存在しない。これが能動態の生産性の高さである。分布の広さとは文脈の自由さである。ゲルバル語で有標構文は文中の特定の位置にしか現れないが無標構文は文頭であれそれ以外の位置であれ自由に生起する。コムリー自身は、英語の能動態についてはこの基準が該当しない、と言うが、本稿では日本語を視野に置くことから、有標性と文脈の制限を相関させるこの見解は注目に値する。

## 類型論

受動態については次のセクションで続けるとして、ここでは最後に類型論における有標性について、クロフト (Croft 1990) とコムリーに依拠して要約しよう。

類型論はプラグ学派と完全に袂を分かち、概念範疇の普遍的性質を追求する。例えば指示対象の単数性という概念は類型論的に無標であり、単数を表す表現は形態素の数がある有標表現より少なく、生起しうる文脈が多いが、このことは英語など個別言語の特質ではなく人間言語一般の特質である、と考える。

類型論的有標性 (typological markedness) は次のような普遍的法則に従う。

- (1) 有標表現の形態素数  $\geq$  無標表現の形態素数
- (2) 有標表現の屈折形態素数  $\leq$  無標表現の屈折形態素数
- (3) 有標表現が現れる文脈では無標表現も現れる

このうち (1) の例としては、英語で複数形を表すのに単数形に *-s* を付加することが挙げられる。このことは複数がある有標であることを物語る。また英語でも日本語でも受動態は形態素数が能動態より多く、受動態がある有標であることが示唆される。ゲルバル語などの能格言語では同じ原則によって逆に、英語の能動態に相当する表現である *antipassive* (逆受動) が有標となる (Comrie:19-20)。(2) の例としては英語の代名詞のパラダイムが挙げられる。複数代名詞は性別を問わず *they* であり、単数代名詞は *he*, *she*, *it* と 3 つの形式を備えている。このことは、単数が無標であることを示唆する。(3) は、前述のように、*resemble* など状態動詞や *kill oneself* など再帰用法のように、能動態があつて受動態が欠如する場合が多いことを言う。(Croft: 87-101)

類型論では中和を有標性の基準から外した。プラグ学派の頃から、中和は個別言語内の現象であつた。これを外し普遍性を求めることで、類型論における有標性は個別言語内の現象を記述するための道具ではなく、複数の言語を比較するための道具になった。

## 有標性とは

研究の姿勢は違っても、有標性が、個別と普遍の区別を超えて、言語を理解するための有力な概念であることに変わりはない。特に、相対的に無標表現の方が形態的に小さく (あるいは弁別素性の数が少なく)、出現の頻度が高く、文脈の制限が少ないという見解はどの立場でも一致していた。これは初めに無標表現ありき、という考えである。そのあとで、有標表現が 2 項間の対立概念として認識されたか、あるいは度合いのあるものであるのかに関しては見解の相違があつた。本稿では、英語と日本語の比較を目的とすることから、有標性に関しては、生産性の基準も加えて、次のような想定のもとに考察を進める。

- (1) 有標な言語表現は無標表現より 1. 形態的に複雑, 2. 使用頻度が低い, 3. 生産性が低い, 4. 文脈の制限が多い, という特徴を有する。
- (2) 有標表現は無標表現と 2 項対立を呈することが多い。

- (3) 有標性あるいは無標性には度合いがある。

## 2. 態とは何か

態についてはクレイマン (Klaiman 1991), 前述のコムリー, 柴谷 (2002), ギヴォン (Givón 1994) を参照して 3 つの立場を概観し, その後で本稿の立場を提案する。以下, 態についての 3 つの立場を, 伝統的な見方, 現代の見方, 第 3 の見方, と呼ぶ。いずれの立場でも, 態は動詞が表す意味である, とする点は同じである。

### 伝統的な見方

伝統的には, 印欧語の記述で動詞の屈折パラダイムにおける能動態と中間態の交替が注目された。例えば古典サンスクリットでは, 主格と対格が同じ語順で生起し, 動詞の形は異なっており, 2 つの形のうちどちらが基本的とも言えない, という現象が見られる。対格主語の文は中間態と呼ばれ, 主語自身が行為の影響を受けていることが動詞の形態によって表される。現代の言語でも, インドのタミール語などでは印欧語の中間態にあたる現象が観察されている。能動態が他者に対する行為 (other-act) を表すのに対して, 中間態は自己に対する行為 (self-act) とも考えられる。(Klaiman: 24)

英語では, 意味の観点からは, 他動詞と自動詞の交替がこれに相当すると考えられる。kick someone と kick (in the air), break (他動詞) と break (自動詞), などである。これらは self-act の観点を採用すれば意味的関連性を捉えることができる。しかし, 形態の観点からは, 英語ではこの関連性が表現されない。自動詞 kick, break, などではどれも形態上は, 能動態と区別できない。Sports cars sell quickly. など中間構文の動詞も形態上は他動詞と同じである。

日本語では, 他動詞と自動詞の交替は形態によって, 「割る」「割れる」, 「焼く」「焼ける」, 「並べる」「並ぶ」, 「混ぜる」「混ぜる」, 「起こす」「起きる」, として明示される。態に関する伝統的な見方は, 英語には当てはまらないが日本語を記述するには有効であるようだ。

### 現代の見方

次に, 現代の見方では, 態を項構造と有標性によって理解する。項構造は動作主, 被動者, などの意味役割で構成され, 動作主を主語とする能動態の項構造が無標である。これに対して, 項の移動により被動者が主語になった受動態は有標である。受動態における動詞形態の形態素数の多さ, 受動態の頻度の低さ, 生産性の低さ, 文脈の制限, の点からも, 受動態は有標性の特徴を備えている。加えて, 英語の受動態では項が交替あるいは動作主項が省略されるが, いずれも動作主と被動者という 2 項にのみ関わり, 2 項の対立を前提とした事柄であるため, この点でも英語の能動態を無標と呼び, 受動態を有標と呼ぶことは当たっている。

類型論的には, 英語のような「能動・受動」(active-passive) 型言語に対してオーストラリアのデルバル語のような「能格・絶対格」(ergative-absolutive) 型言語が正反対の項構造

を示す (Comrie: 10-12)。しかし、正反対であるだけにかえて現代の、英語的な見方でこういった言語の態を記述することが可能である。こうして、態イコール項構造、英語受動態イコール有標、という 2 組の方程式が現代に定着した。この見方に沿って、柴谷 (2002: 14; 18) のように日本語を英語と同じ「対格言語」とみなす傾向があるが、本稿では、この見方では日本語の態の真実は見えてこないと考える。

### 第 3 の見方

第 3 の見方では態を「語用論的態 (pragmatic voice)」(Klaiman) あるいは「流動的態体系 (fluid voice system)」(柴谷: 32) として理解する。フィリピン語のタガログ語、カナダのインディアン語、グアテマラのイシル語、インドネシア語、朝鮮語などは、態の 3 つの見方のうち伝統と現代のいずれにも当てはまらない。これらの言語では、存在論的あるいは情動的に突出した、際立った (salient) 要素が主語になる傾向が見られるのだ。存在論的に際立つとは、英語に関してディクソンが提唱している「指示の階層 (referential hierarchy)」(Dixon: 300) の上位にあるということで、1 人称・2 人称・人の固有名・人の確定記述・人の不確定記述・無生物 (e.g. I-you-Mary-that old man/my friend-boys-the blue cardigan-an ice cream) の順序で指示性が高く、存在論的に際立っている。この階層の上位の要素が主語に選ばれて、そこから下位のものへ行為が及ぶのが direct voice である。カナダのインディアン語ではこの順序に反する場合を inverse-voice で表し、また朝鮮語も非常に単純な direct-inverse 体系を示す (Klaiman: 32; 171)。

英語にあてはめて考えると、My brother owns many cars. と Many cars belong to my brother. などにおいて、指示の階層の上位にある my brother を主語とする own と、下位の cars を主語とする belong to の形態を区別して階層の逆転を合図することになる。実際に英語でも own が 1 語動詞であるのに対して belong to が 2 語動詞であるという違いが見られるが、通常、それは態の違いとはみなされない。しかし本稿では、これをも態の違いとみなすべきだと考える。

情動的に際立つとは、トピックであるということだ。イシル語では、ある要素がトピックであり情動的に際立つことを動詞の形態が表示する。これらの言語では、トピックとなる意味役割が受容者、受益者、道具、場所など多種にわたり、動詞形態の複雑さの度合いにも差が見られないことから、有標性の概念は態を理解する上で役に立たない。(Klaiman: Preface; 31-33; 161-259; Comrie: 20-21)

### 本稿の見方

態に関する 3 つの見方を比較すると、伝統的な見方がもっとも基本的かつ包括的である。伝統的な見方に立てば、態を出来事への参加者の関わり方として捉えることができる。一方、動作主・被動者という意味役割によって態を理解する現代の方法では、日本語のように主語・目的語の意味が英語のそれと異なり (cf. 宗宮・下地 2004)、かつ英語よりはるかに豊かな動詞形態をもつ言語に適用できないことは明らかだ。態を項構造として解釈するという現代の見方では、態は出来事の参加者どうしの関係を表すものとして捉えられる。しか

し、参与者間の関係はすでに主語と目的語が表現しており、その点で「態」と重複してしまう。態は参与者間の関係を表すのではなく、出来事あるいは広く事態に参与者がどう関わったかを表す、と考える方が、態の存在理由の点からも当たっている。関わり方は言語によって多様でありうる、と考えれば、現代の理論で例外的あるいは非プロトタイプの(Comrie: 21)とされる第3のグループが示す現象も扱い易くなるだろう。そこで本稿では態を次のように定義する。

態は、動詞形態が表すところの、事態への参与者の関わり方である

本稿が提案するこの見方は、フレーム意味論(cf. Fillmore 1982)を援用している。フレームは経験の断片の心理的な図式化であり、話者たちに共有される。1つの事態のフレームの中にはさまざまなフレーム要素が含まれており、その各々が出来事に何らかの形で関わっている。どの要素に注目して文を作るかによって、同じ事態が異なった命題として表現される。何に注目するか、は理想的には話者が決めることとはいえ、当該の個別言語による方向付けがあり、文脈から自然に要請されることも多い。主語に選ばれたフレーム要素は「前景化(foregrounding)」された、あるいは事態がその要素の「視点(perspective)」から捉えられた、と考える。一方、文要素の位置から外れ前置詞句の中に起きるもの、あるいは全く文中に現れないものは「背景化(backgrounding)」されたことになる。

本稿では、主語に選ばれた要素は声すなわちヴォイス(voice)を出せる、と考える。どんなフレーム要素がどんな声を出せるのか、は個別言語の文法によって決まる。そこから当該の言語の性質も見えてくる。英語と日本語の態を比較するには、このような方法を採用必要がある。

本稿の方法では、既成の意味役割より細かい分類が必要になる。言い換えれば、普遍性の高い意味役割に加えて、個別言語に独特のさまざまな意味役割が、態を記述するために必要になる。そこからその言語圏の文化が垣間見られることにもなるだろう。

英語の場合は、動作主と被動者は声を出せることが明らかだ。次のセクションでは、他にどんな要素がどんな声を出すのか、英語の受動態とはいったい何であるのか、それにより英語のどのような性質が見えるのかを観察する。

### 3. 英語受動態

態が事態・参与者関係の動詞形態における表れであるとして、英語の動詞形態それ自体はほとんど何も語らない。そこで本稿では、主語となる参与者の側から文を分類し、英語の態の特徴を観察するという方法を採用。先に有標性の考察にあたって、形態の複雑さ、使用頻度、生産性、文脈制限、2項対立、有標性の度合い、という特徴に注目した。英語の態はこれらの特徴に関してどのような性質を見せてくるのだろうか。

## 構文と態

主語の性質の観点から、英語の単文は次の 7 種類に分かれる。

- (1) 動作主や原因を主語とする SVO 文  
(e.g. John washed the shirt/ The typhoon destroyed the bridge.)
- (2) 動作主を主語とする SV 文  
(e.g. John swam across the lake/ The president lectured in this hall.)
- (3) 対象（すなわち主題）を主語とする SVO 文  
(e.g. Mary resembles her mother/ Tall trees surround the castle.)
- (4) 対象を主語とする SV 文  
(e.g. The camera broke/ Humpty fell off the wall.)
- (5) 被動者を主語とする SV 文すなわち中間構文  
(e.g. Sports cars sell quickly/ Cotton washes well.)
- (6) 被動者を主語とする SV 文すなわち受動態文  
(e.g. Caesar was killed by Brutus/ The office was searched by the police.)
- (7) 高位の使役者を主語とする文（語彙的使役文を含む）  
(e.g. John made his secretary leave the office/ John had Mary's hair cut by the best hairdresser in town/ The conductor marched his band through the town.)

(1) が英語でもっとも基本的で無標の構文であり、受動態は、（そして SV 文なども）この構文からの派生であると考えられる (Sohmiya 2004)。英語の SVO 構文は構文の意味として因果関係を表すところから (cf. Levin & Hovav 1995; 宗宮・下地 2004)、主語が動作主である必要はなく、強い原因性を含意するものであることが重要だ。人か物かの区別が英語ではさほど重要でないようだ。以下では便宜上、動作主と原因をまとめて「動作主」と呼ぶ。

動作主を主語とする SVO 文の V は、1 語動詞であり、形態の単純さの点で限りなく無標である。使用頻度も、書き手の文体的嗜好を反映しない客観描写では明らかに高い。生産性の点でも、受動態、命令文、進行形、擬似分裂文 (e.g. What he did was wash the shirt.) など多種の文に姿を変えて用いられ、受動態に対する能動態としてのみでなく、さまざまな構文に対して無標の構文という位置づけができる。文脈の制限も特に無く、主節、従属節を問わず自由に生起する上に、先の「トラックと木」の例でも、受動態が許容される文脈で受動態と並んで能動態が許容される。

この SVO 文に対応する受動態の方は、形態、頻度、生産性、文脈、2 項対立、のすべての観点から、大いに有標である。

## 動作主役割と被動者役割

本稿では終始、2 項対立を有標性の重要な条件として注目する。しかし、英語受動態における 2 項対立は言語表現の間の対立ではなく、動作主（あるいは原因）と被動者という

抽象的な意味役割のレベルでの 2 項対立だ。以下では、英語の受動態は、動詞の形態からは定義することができず、参与者の意味役割によって決まることを論じる。

(1) と (2) から、動作主が被動者の存在を前提としない概念であることが分かる。被動者の有無に関わらず、動詞は能動態である。(2) の主語は意思をもつ人あるいはこれに準じるものである。伝統的な見方と言う *self-act* にあたり、被動者は存在しないが、例えば「海峡を泳ぎきった」という達成感を表すために *She swam the English Channel.* (Dixon: 281) と SVO 文で言うこともできるのはよく知られた事実だ。しかしこれに対応する受動態は存在しない。この生産性の低さが、(2) から派生した SVO 文の無標性の低さを示している。それというのも、*English Channel* などは場所であって被動者でないから、と考えれば、受動態における被動者の重要性、ひいては動作主と被動者の 2 項対立の重要性が見えてくる。

通常、(2) の構文に現れる動詞が目的語のような要素をとるためには前置詞の助けが必要であるが、*swim across*, *walk into*, *lecture in* などとする時には、形態的複雑さが増した分だけ有標性が増すことになる。また、*The hall was lectured in by the President/This bed has been slept in!* など、無標のままでは許容されなかった受動態が、前置詞を付加して有標性を明示した能動文ならば、ごく限られた文脈においては可能となることは興味深い。ただしこの種の受動態は、動作主が有名人であるなど擬似目的語への影響が明らかなこととして了解されねばならず、従って通常は *by* 句を省略できない、あるいは、影響が視覚的に明らかでなければならない、などの文脈上の制限が厳しく、非常に有標である。ここでは、無標性の低い表現に対応する有標表現は有標性が高い、という相関性が観察できる。さらに、このような前置詞受動が可能なことからも、受動態の成立条件として動作主の存在が不可欠であると言える。

### 形容詞受動文は受動態でない

(3) は受動態にならないか、あるいは逆に「受動態」にする方が自然である (*\*Mary's mother is resembled by Mary; The castle is surrounded by tall trees.*)。resemble などを用いた文が受動態を欠く理由は、動作主と被動者の欠如、事態の対称性ゆえに受動態が無意味であること、などが一般的に指摘されている。

本稿にとって興味深いのは *surround* の例の方である。*Tall trees surround the castle.* に対応する過去分詞を用いた文 *The castle is surrounded by tall trees.* は形容詞受動文 (adjectival passive) である。動作主が欠如し被動者も存在しない形容詞受動は、受動態ではない。別の例として *Oranges contain Vitamin C.* と *Vitamin C is contained in oranges.* が挙げられる。この 2 組 4 文の主語の意味役割はどれも対象であり、各組の 2 文間の無標性の度合いの違いも不明である。実際、*Orange/Vitamin C* 文では、形容詞受動が受動態でないことが *in* によって統語的に明示されている。

「*be* + 過去分詞」という動詞形態は、受動態を表すとは限らない。*His face was unshaven.* などはいわゆる SVC 文であり、本稿の上の分類では (4) に属する。この文は、*by* 句が不在である点では通常の受動態に似ている。しかし、*\*unshave* という動詞が存在しないことから、受動態ではありえない。*unshaven* は形容詞なのだ。この文はまた、*His face looked*

unshaven. という SVC 文で言い換えることが容易であり、意味的にも近似している。(2 種類の過去分詞に関しては Levin & Rappaport 1986: 625-6 が詳しい。)

(1) の SVO 文と (3) の SVO 文に話を戻そう。(1) と (3) を区別する基準は他にも存在する。まず統語的に、(3) に分類される能動文には対応する命令文、進行形、What A did was B 型の擬似分裂文、のいずれも存在しない。つまり (3) は、形態上は (1) に類似し、使用頻度も高いが、生産性は低いと言える。(3) に対応する受動態に似た形容詞受動文は、通常 by 句その他の付加表現を省略できない点も、本来の受動態で動作主句が省略されることの方が多くのと対照的である。意味の上からは、動作主と被動者が存在しない。主語の意味役割と文が表す状態性の点で、形容詞受動はむしろ (4) に近い。

(1) と (3) に関する言語事実から、被動者が動作主の存在を前提としていることが分かる。従って、動作主が存在すれば受動態も存在しうが、動作主が不在であれば受動態も存在しない。形容詞受動は本来の受動態のような有標性をもたず、動詞過去分詞形が用いられている点を除けば The castle was magnificent. などの状態文と用法が並行する。

(3) が状態文であることは resemble のように動詞自体から判明することもあるが、surround の例のように文のシンタグムから判断する必要のあることが多い。このことから、英語は、動詞の形態それ自体ではなく、構文が全体として提供する意味情報から、態すなわち事態と参与者の関係を理解するよう構造化された言語であると言える。それにしても、英語における態の体系は極めて単純で、意味役割が提供する情報以上のことを伝えないことに注目したい。

### 動詞形態は多くを語らない

(4) で用いられる動詞には、自他交替する自動詞と非対格動詞が含まれる。(4) の主語は、本来は目的語の位置に現れるべきフレーム要素が主語の位置に生じたものと考えられる。英語は形態上では他動詞と自動詞の区別をしない言語であるため、態の観点からの (1), (2) と (4) との相違が動詞に反映しない。伝統的な態研究では参与者が行為の影響を受けたかどうか注目するが、英語の動詞形態はそれについて語らない。

(5) は、本来的に他動詞である動詞の自動詞用法を含む、いわゆる中間構文である。中間構文では、主語が被動者であるにもかかわらず動詞は受動態をとらず能動態である。スポーツカーの売れ足が速い、あるいは木綿の洗濯落ちが良い、などの事態においては、動作主の貢献は小さく、むしろ事態は被動者の特質に起因する。この時、フレームの中で動作主は完全に背景化され捨象されている。動作主は不在に等しく、被動者主語が能動態で表現される。被動者であるフレーム要素をいわば強引に対象として扱おうとする中間構文は、意味的にかなりめだつ有標な構文である。

統語的にも、この構文で許容される動詞は状態変化動詞など一部の動詞に限られ、主語が総称的であることが望ましい、easily, well などの副詞を付加するのが望ましい、など文脈上の制約があることから、中間構文は生産性の低い、かなり有標な構文であると言える。

中間構文は、動作主の不在 (の程度) に関しても、動詞の形態に関しても、(4) と (6) の中間に位置する、まさに中間の構文である。英語の態が参与者の意味役割、特に動作主

と被動者の関係、に基づいて決まることから、これを英語における中間態と呼ぶこともできるが、伝統的に印欧語に関して言われる中間態と異なっていて紛らわしい。英語の中間構文は、sell や wash に自動詞用法が無い、という動詞パラダイムに関する知識を前提として始めてその有標性を発揮する。動詞形態からは、(4) の文と区別できないのだ。

### 英語の能動態と受動態

これまでのところで注目すべきは、英語では、動作主が不在である場合には対象や被動者が能動的な声を上げることだ。ここで能動的とは、形態上で能動・受動の区別がつかない、という意味にすぎないが、中間構文に至っては、通常は動作主を表す他動詞形態が用いられており、動詞形態上では完全に能動的である。

英語の非対格の自動詞は本来、狭義の動作主以外の原因による、いわば自発的な出来事を表す (Levin & Hovav 1995) と考えれば、さまざまな要素が動作主不在のフレームで能動的な声を上げるのは、事態を成立させるのにもっとも大きく貢献する参与者であるから、と考えられる。つまり英語では、動作主と限らずどのフレーム要素も、それが事態成立の中心的要素である時には主語となる。そして能動態の動詞をとる。言い換えれば英語では、主語であることと事態成立の立役者であることは同じ事柄であり、それが主語と動詞によって重複的に表現される。英語の態体系が単純である理由もここにある。態は、どの要素が事態を成立させているか、という1事のみを表すのだ。

そのような英語において、(6) が示すように、動作主がフレーム中に存在している時に被動者が事態成立の重要な「脇役」として声を上げることがある。この時の声は受動的な声であり、そのことが動作主と被動者の相補性と、この構文の有標性を示している。(6) は、動詞形態の相対的複雑さ (be + V-en ± by 名詞句)、使用頻度の低さ、生産性の低さ、文脈の制限、動作主・被動者の2項対立、のあらゆる点で非常に有標である。これまで観察した英語の性質を考えても、背景化されたとはいえフレームの中に動作主が存在する時に、動作主に優先して主語になるのは極めて特異なことであり、文脈からの強い要請が無い限り許容されないことである。

しかし、ここでも文のシンタグムを見なければ意味役割が判明せず、従って態が特定できない。この意味で、態は構文が既に述べていることを重複して表しているにすぎない。動詞形態のみでは受動態文は先の形容詞受動文、さらには Mary was very surprised. などの状態文と区別できない。

### 意味役割が態を決める

ここまでのところで、英語の態は動作主の存在・不在をめぐる現象であること、能動態は無標であるが、諸構文の無標性あるいは有標性は態とは別の事柄であること、構文の有標性には度合いがあること、を見た。非常に有標な構文のうち受動態文では、動作主が事態に大きく関与している。これに対して中間構文では、動作主・被動者の関係が取り消されている観があったが、いずれの場合も、動作主が構文と態を決定する最重要の要素であることが確認できた。

主語と事態との関わり方は、英語の動詞形態からは見えてこない。主語の性質の違いが「声」に反映していない。これは中和の現象であり、ここでも能動態が無標であることが示唆される。態が多くを語らないため、話者たちは参与者と事態との関係を、個々の動詞の意味と文のシンタグムから、間接的かつ曖昧に了解する。

これまでのところ、英語の態について次のようにまとめることができる。

- (i) 英語の態は、動詞形態のみから決定することはできず、文のシンタグムや構文から判断される主語の性質によって決まる。
- (ii) 英語の能動態は、その文の主語が事態の成立にもっとも中心的な役割を果たした要素であることを表す。
- (iii) 動作主が不在の時、その他の要素が主語となり、能動態をとる。
- (iv) 能動態は無標である。
- (v) 能動態と受動態の無標・有標の対立は、動作主と被動者の対立に還元される。
- (vi) 無標性と有標性は態とは別の事柄であり、非常に有標な能動態文もある。
- (vii) 英語の受動態は、その文の主語が動作主と 2 項対立的な被動者であり、事態成立に受動的な役割を果たした要素であることを表す。

### 使役者役割

最後に、次のセクションで論じる日本語との関連で、英語における使役者と、さらには被害者について見てみよう。

(7) では、従属節が表す事態を事態①、文全体が表す事態を事態②とすれば、事態①を成立させる動作主①が存在する上に、さらに上位の動作主②が同じフレーム内に存在し事態②を成立させている。上位の動作主は使役者として能動的な声を出す。フレーム要素間の関係の複雑さが、この種の文の有標性となって表出する。

統語的には、動詞が *make*, *have*, *let*, *help* に限定される。語彙的使役文に至っては使用頻度が非常に低く、空間配置動詞 (*verbs of spatial configuration*) と呼ばれる一部の自動詞に限って他動詞として用いる (e.g. *They stood me in front of a mirror.*)。受動態に関しては、*His secretary was made to leave the office* など自然な響きがするが、*make* 以外の動詞では受動態が見られず、生産性が低い。さらに、事態①は独自の時制を与えられず、事態①の動作主が上位の SVO 文中で目的語として被動者の位置づけをされる、など有標性に通じる制約が存在する。(7) は非常に有標な能動態と呼べる。

### 経験者役割

(7) における事態②の主語は使役者であるとは限らない。*John had Mary's hair cut by the best hairdresser in town* では John は使役者である。しかし、*John had his hair cut by someone while asleep* などでは、John は髪を切られてしまった被害者であると見るのが自然だ。主語 John と目的語 *his hair* は人と譲渡不可能な所有物の関係にある。英語では、その場合に限

り被害者が声を出すことが可能である。ここでは his hair は事態①でも②でも被動者、John がそれによって被害を受ける人である。

ただし、被害の読みは文全体の意味から間接的に得られるにすぎず、John had his daughter praised by the people present. などでは被害性は伝わらない。この種の have 文の主語は、被害者というよりは広く経験者と呼ぶのが相応しい。

英語において、被害者はむしろ on という前置詞句の中に生起する。My PC crashed on me/ Don't play a sullen teenager on your mother/ My boyfriend walked out on me. など、前置詞 on の目的語は事態の間接的な参与者であり事態の被害者である。被害者は態に関連しない。被害者は声を出さない。

使役者と経験者については、先の (i) から (vii) に次の (viii) を加えることができる。

(viii) 事態の成立に間接的に関与した参与者は、使役者あるいは経験者として能動態文の主語となることができる。

## 対立の際だち

動詞形態でなく意味役割の観点から観察すると、英語には有標・無標の度合いの異なるさまざまな「態」が存在すると考えることもできそう。それらは能動態、自発態、中間態、受動態、使役態、経験態、とでもなろう。しかし、動詞形態を態の定義に含む限り、これらの態は検出されない。本稿では、意味役割と有標性の概念を利用して、能動態と受動態が突出して対立していることを確認した。この2者は使用頻度も高い。その他の「態」は、いずれかの下位類としてまとめることができる。言い換えれば、いわゆる能動態と受動態の対立は確かに存在する。しかし、その対立は動作主と被動者の対立に還元されるということである。

以上、伝統的な態研究の理念とフレーム意味論の考えを援用し、統語的基準を用い、有標性の概念を適用して態を観察することで、英語の態の実体がよく見えた。ちなみに、英語の「アクティヴ好き」という特徴は、英語圏の文化にもあてはまりそう。

## 4. 日本語の態

### 英語的発想の分析

このセクションでは、日本語の態を分析する。英語に関して意味役割と文型によって動詞を分類したように、日本語でもまず主語の意味役割に基づいて分類してみる。

(ア) 動作主を主語とする「が」「を」文

(例：太郎が皿を並べた；太郎が髪を切った；太郎が声をはずませた)

(イ) 動作主を主語とする「が」文

(例：太郎が踊った；太郎がこの部屋で講義した)

(ウ) 対象を主語とする「が」「を」文

(例：？牛乳がカルシウムを含んでいる；森が皇居を隠している)

(エ) 対象を主語とする「が」文

(例：太郎が倒れた；皿が割れた)

(オ) 被動者を主語とする「が」文

(例：太郎が暴徒に襲われた；太郎が財布を盗まれた；責任者が更迭された)

(カ) 高位の使役者を主語とする文

(例：太郎が次郎を[に]走らせた；太郎が次郎に髪を切らせた)

上の分類では、動詞の形態類が分断されてしまい、有意義な一般化が得られない。(ア)では、皿を並べるのが他者への行為であるのに対して髪を切るのは曖昧であること、「はずませる」は自動詞「はずむ」の使役用法であることが隠されてしまう。(イ)の「講義する」は「講義をする」とも言える。(ウ)の「牛乳」文は「が」を「は」で代用すればトピック・コメントの情報構造が出現して自然な文になる(本稿ではトピックについては省略する)が、このままでは不自然な文であり、むしろ「カルシウム」を主語にして受動文にする方が自然である。一方、「皇居」文は、ここに挙げた能動文と「皇居が森に/で隠されている」「皇居が森に隠れている」は同じ程度に自然である。また、(エ)のような自発的な事態にも、対応する受動態が許容される場合がある(「太郎に倒れられた」「\*皿に割れられた」)が、この分類では隠れてしまう。(オ)の「太郎が財布を盗まれた」で、厳密には被動者は財布であるのに、太郎が被害者として主語になっており、受動態が被害性を表している。(カ)のような使役文は、多くの動詞に適用できる。さらに、受動態は、(オ)以外の多くの動詞に対応する。上の分類は日本語に関するこういった事実を捉えることができず、明らかに失敗である。

## 日本語を見つめる

上のような英語的発想の分析からは、日本語を英語の鋳型にはめ込むことで英語と日本語の共通部分を抽出することはできても、日本語の態の本質を捉えることはできない。そもそも日本語の主語・目的語は、英語のそれとは性質を異にし、格標示の助けを借りて話者の共感を合図する(宗宮・下地 2004)。日本語では英語と同様に人が主語に選ばれることが多いが、動作主であるからではなく話者が共感を寄せるからであることが多い。「が格」と「を格」は本来的に共感を標示する。英語の主語・目的語とは意味を異にする。

そこで、日本語に関しては、1 語動詞の形態によって分類する。まず他動詞用法を基本とする動詞と、自動詞用法を基本とする動詞に分ける。両方の用法が存在する場合には対応する派生形態の多い方を基本形、もう一方を派生形とする。暫定的に他動詞用法を「能動」に、自動詞用法を「自発」にあてはめ、一般的に日本語の動詞形態を論じるのに用いられる「可能・尊敬・受動・使役」の形態と共に観察する。派生形態からのさらなる派生形態は改行して( )で示す。(表 1)

表 1. 日本語の動詞（例）とその形態

	能動	自発	可能	尊敬	受動	使役
本来他動詞	思う	思われる	思える	思われる	思われる	思わせる
	分かる	分かる	分かる	分かれる	分かれる	分からせる
	する	できる	できる	される	される	させる
	見る	見える	見える/ 見（ら）れる	見られる	見られる	見せる/ 見させる
	書く	書ける	書ける	書かれる	書かれる	書かせる
	割る	割れる	割れる	割られる	割られる	割らせる
	壊す	壊れる	壊せる	壊される	壊される/ （壊れられる）	壊させる/ （壊れさせる）
	倒す	倒れる	倒せる	倒される/ （倒れられる）	倒される/ （倒れられる）	倒させる/ （倒れさせる）
	褒める	——	褒め（ら）れる	褒められる	褒められる	褒めさせる
	建てる	建つ	建て（ら）れる	建てられる	建てられる	建てさせる
	食べる	——	食べ（ら）れる	食べられる	食べられる	食べさせる
	投げる	——	投げ（ら）れる	投げられる	投げられる	投げさせる
本来自動詞	——	歩く	歩ける	歩かれる	歩かれる	歩かせる
	——	泣く/ 泣ける	泣ける	泣かれる	泣かれる	泣かせる
	——	立つ	立てる	立たれる	立たれる	立たせる
	——	咲く	咲ける	——	——	咲かせる
	——	実る	実れる	——	——	実らせる
	——	来る	来（ら）れる	来られる	来られる	来させる
その他	移す	移る	移せる/ （移れる）	移される/ （移られる）	移される/ （移られる）	移させる/ （移らせる）
	起こす	起きる	起こせる/ （起き（ら）れる）	起こされる/ （起きられる）	起こされる/ （起きられる）	起こさせる/ （起きさせる）
	並べる	並ぶ	並べ（ら）れる/ （並べる）	並ばれる/ （並べられる）	並ばれる/ （並べられる）	並ばせる/ （並べさせる）
	浸ける	浸かる	浸け（ら）れる/ （浸かれる）	浸けられる/ （浸かられる）	浸けられる/ （浸かられる）	浸けさせる/ （浸からせる）

暫定的に他動詞を能動，自動詞を自発として区別したのは適正であった。上の表で，自発は他動詞の目的語を主体とする。ただし「思う」「分かる」「する」「見る」の4つの動詞は例外である。これらは，宗宮・下地（2004）で「が格」目的語を取る，として特定したグループに属する。「思う」の自発形「思われる」は，通常「自発」の典型のように例に挙げられる語であるが，自動詞ではない。「太郎はそう思う」と「太郎にはそう思われる」で，思

う主体はいずれも「太郎」である。「分かる」も自他の区別が無い。「(を) する」と「(が) できる」には能動と自発の関係がある、と本稿では考える。「見る」の自発は「見える」であるが、「思う」と同様に「太郎が星を見る (こと)」と「太郎に星が見える (こと)」の主語はいずれも「太郎」である。これらの心理・感覚・能力に関する動詞では、主体と客体の境界が曖昧になると思われる。

表 1 では、これら 4 つの動詞が例外的なグループであることを 2 重の罫線で示した。ちなみに、表 1 では動詞 5 段活用、1 段活用、変格活用も 2 重罫線で区別したが、特にそれによる発見は無かった。

### マルチな非能動態

心理・感覚・能力に関する動詞を除けば、他動性を能動の範疇に入れ、自動性を自発としたことは記述上で支障が無かった。ただし用語について解説すると、本稿では従来の能動の概念を、他者への働きかけを含む能動と、自己のみを含む自発に分け、「能動」という用語を前者に限定して狭義に用いる。一方、従来の自発の概念は拡張され、例えば、意思をもって人が「歩く」こと、自然に花が「咲く」こと、人の行為の結果として家が「建つ」ことが、本稿の定義では同じ範疇に属している。これ以降はこの、本稿独自の定義に従って、これらを「能動態」「自発態」、両者を合わせた広義の能動態を「動態」と呼ぶ。ちなみに「使役態」は動態から規則的に派生する間接的な動態、と位置づけられる。

日本語文法では「能動態」「自発態」「可能態」「受動態」「使役態」という用語が用いられるが (cf. 岩淵 2000), 「尊敬」は態とみなされていない。本稿では、前 5 者に加えて「尊敬態」も存在すると考える。

さて、表 1 からは、次の特徴が観察できる。

- (1) 動態の中で、能動態と自発態が対比する
- (2) 能動態と非能動態が対比する
- (3) 動態と受動態が対比する
- (4) 人と物が対比する

(1) については、能動態と自発態は広い意味の能動である動態を構成し、それぞれに派生態を有している。この意味で、この 2 つはどちらも基本的でありながら対比している。(2) については、能動態は必ず対応する受動態を有するが、自発態では、人あるいは人に準じるものに起きる事態のみが受動態を有し、生産性が低い。人でない場合、例えば「皿が割れる」にはどんな受動態も対応しない。しかも自発に対応する受動態は間接的な被害を表すことが多い。この意味で自発態は能動態より能動性が低いと考えられる。また、可能態は意思でなく能力の発現により事態が成立したことを言う。尊敬態については後述するとして、使役態以外のすべての非能動態は、能動性の低さを共通の特徴とし、能動態と対比する。(3) については (2) で既に述べた。(4) についても (2) から明らかであるが、ここで興味深いのは使役態である。使役態は、「咲く」「実る」あるいは「(顔が) ほてる」

「(息が) きれる」など、自然の帰結であることがらにも対応する。すなわち日本語には、物に起きたことはその所有者の所業とする傾向があり、これも人と物の対比の一つの現れである。「事故で子供を死なせる」の「子供」なども物に準じる。

(1) から (4) を通して、形態の単純さ、使用頻度の高さ、生産性の高さ、文脈制限の緩さの点で能動態が無標と言える。有標性については、このように対比の種類、態の種類ともに多く、対比の関係が入り組んでいる日本語について有標を論じるのはもはや意味が無いかもしれない。それでも、人に関する自発態に対応する受動態と、物に関する自発態に対応する使役態はかなり有標である。本稿ではこれ以降、この2つの現象を説明する原則を提案し、最後に尊敬態を日本語の態の一つとして位置づける。

### 「に」受動と「によって」受動

受動態に関するここまでの議論は、「に格」を伴う受動態を想定しているが、日本語には「によって」を伴う受動態も存在する。こちらはやや形式ばった感じを伴い、能動態にのみ対応して自発態には対応しない。「に」受動が容認されない文脈で容認されることがある一方で、「に」受動に比べて不自然に響く場合もある。

- ① 開会が議長によって宣言された/\*開会が議長に宣言された (Hoshi: 197)
- ② 寺が暴漢によって焼かれた/\*寺が暴漢に焼かれた
- ③ 寺が暴漢によって襲われた/寺が暴漢に襲われた
- ④ 法隆寺が[原文では「は」]聖徳太子によって建てられた/\*法隆寺が聖徳太子に建てられた (村木: 17)
- ⑤ ?太郎が花子によってPCを壊された/太郎が花子にPCを壊された
- ⑥ \*太郎が映画館で子供によって泣かれ(て困っ)た/太郎が映画館で子供に泣かれ(て困っ)た

Hoshi (1999) は、「に」受動と「によって」受動の違いが各々、英語の *get* 受動と *by* 受動の違いに対応すると示唆している (Hoshi: 199)。ディクソンによれば、無標の *be* 受動に対して有標の *get* 受動では、受動態の主語の側に何らかの原因性が帰される意味合いがある (e.g. *John got fired/ Mary got promoted.*) (Dixon: 302)。

確かに、*get* 受動と「に」受動は、主語が通常は人である点と、文に何らかの感情がこもるという点が共通している。しかし、感情の由来と感情の性質が異なっている。「に」受動は因果関係を含意するというよりは、あくまでも他者の心理的近接性を表す (⑤)。感情がこもることは、格助詞の体系自体が共感を意味することに由来する。

村木 (1991) は、主語が非人間でむしろ動作主を強調したい時や、動詞がある対象物を生み出すという意味を持つ場合に「によって」受動が用いられると言う (e.g. 「邪魔な物が隣人によって/\*に廊下に運び出された//④」) (村木: 17)。

本稿の見方では、非人間は話者の共感を欠き、他者である「に格」要素と同等の「大きさ」をもつ「が格」主語として扱いにくいのだ、と考える。このため、非人間を主語とす

る受動態で動作主を明示する場合は、反感要素を標示する「に」の使用を避け、感情を担わない「によって」を用いることで均衡を図る。④なども、動詞の表す行為以前に存在すらしていないものに他者と対峙するに足る共感を寄せることができないため、他者の方を文から消し去った、と見るべきである。「に」に代わって「によって」を用いることにより共感・反感の関係が消え去り、代わりに動作主と被動者の関係が表現される。このような文は客観的に事実を述べる。「によって」受動は、客観的であること、態が話者の共感ではなく、もっぱら文脈からの要請で決まること、動作主をもつ能動態からの派生であること、の点で英語の受動態に似ている。

一方、「に」受動は人中心である。③で「寺」という非人間を主語とする「に」受動が容認されるのは、「襲われる」という事態が人の身にも起きうることであるからだ。この時「寺」は擬人的に扱われている。上で見たように、「に」受動は、人を主語とする自発態に対応する(⑥)一方で、物目的語の能動態に対応しない(④)。日本語の受動態は本来、人の身に何か起きたことを、その人の立場から表すための言語的工夫であるようだ。「に」受動には話者の共感がつきまとう。

本稿では、「に」受動の生産性の高さ、「に」が格助詞体系の一角をなすこと、文体的中立性、から、「に」受動態を「によって」受動態に対して無標であると考える。

### 受動態における他者

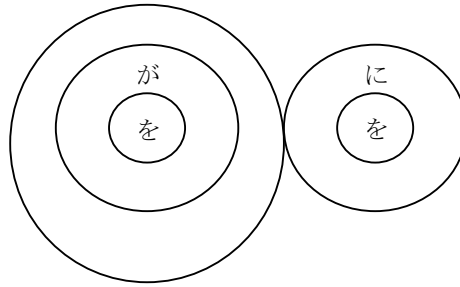
ここからは「に」受動態に限定して論じる。⑤で、花子が壊したのは太郎の PC であるのに、太郎自身が被害者であるかのように表現される。「が」と「を」に象徴される全体と部分の関係のために、人の所有物に起きたことは人自身に起きたこととみなせるのだ。この受動文では花子が他者の要素として扱われる。「花子が太郎の PC を壊した」という身内どうしの関係から、花子が他者として外に押し出された形だ。「に」受動態は必ず他者を生成するが、この種の受動態では主語は必らずしも被害者ではない。

先の⑥の類の受動態は「被害受動」と呼ばれ、他の例として次のようなものがある。

- ⑦ 授業中、先生に自画自賛され(て生徒がしらけた)
- ⑧ 次郎に出世され(て、太郎は心中穏やかでなかった)
- ⑨ ジョンが[原文では「は」]一人娘にアメリカ人と結婚された  
(Wierzbicka:264)
- ⑩ 太郎が子供に家出された

このうち⑦と⑧では、先生、次郎、という他者に良いことが起きて、それを喜べない気持ちを読める。他者の幸は身内の不幸というわけである。⑨と⑩では、本来調和的であるべきジョンと1人娘、太郎と子供、といった身内同士の大小関係が、身内と他者の同等関係に変わっている。いわば身内が反逆している。こちらの方が⑦⑧より文脈制限が緩く、その意味で無理のない被害受動である。身内と他者の大小と遠近の関係については図1を参照されたい。

図 1. 日本語のエンパシーの階層



「に」受動態が生成される条件をまとめると次の3つである。

「他者の生成」の原則：身内同士の大小関係が身内と他者の同等関係に変わる。

「他者の幸」の原則：隣接する他者の幸は身内の不幸と見る。

「身内の反逆」の原則：身内が他者のようにふるまう。

これらの原則に加えて、動詞の意味内容、他者の隣接の度合い、身内の反逆の度合いが連動することにより、「に」受動態は時に強い被害性を表すのである。ちなみに、有名な「雨に降られた」は、強いて言えば「身内の反逆」の原則による。雨は日本人にとって特別に愛着のある自然現象であり、雨を表すことばが多いことから親しみの心が伺われる。しかし、母語話者の間でも、急に雨が降って傘もなく濡れてしまったのか、雨天延期などの不都合でも用いるのか、用法が定かでなく、話者によってはこの表現を全く容認しない向きもある。

### 使役態における身内

人に関する自発態に対応する受動態と並んで有標な、物に関する自発態に対応する使役態も、図1の共感関係によって説明できる。まず例を見てみよう。

- ⑪ 太郎が男をすたらせた/太郎の男がすたった
  - ⑫ 太郎が目を光らせた/太郎の目が光った
  - ⑬ 太郎が火事で子供を死なせた/火事で太郎の子供が死んだ
- cf. 太郎が火事で子供に死なれた

本稿ではこの特別な使役態を「自発使役」と呼ぶ。上の例で⑪の「男」、⑫の「目」、⑬の「子供」は身の内、所属物と考えられる。意思によらない、いわゆる非対格型の自動詞に対応するこの自発使役態は、身内の「を」要素に起きた変化を「が」要素の責任とする原則を想定することで説明できる。この原則は上の「に」受動態の3原則とともに、共感の体系から自然に帰結する。

「身内の責任」の原則：身内の「を」要素に起きた変化は「が」要素の責任。

これらの原則のどれを使うかは話者に任されるため、同じ事態を「子供に死なれた」と受動態で表すことも「子供を死なせた」と使役態で表すこともできる。主観性を排除した「子供が死んだ」も可能である。

原則にも主観性が色濃く出るのが日本語の特徴であるようだ。例えば、家族が路頭に迷う、という状況について「家族を路頭に迷わせるわけにはいかない」などと言えるが、この自発使役の表す責任感を回避して、ある話者は「家族が路頭に迷うわけにはいかない」と言った。この場合、さすがに「家族に路頭に迷われるわけにはいかない」という被害受動は不適切である。

実際には、被害受動も自発使役も単独で主節を構成することは少なく、上の例のように「・・・わけにはいかない」「・・・されて困った」などとして従属的に用いることが多い。制約の存在はこれらの用法の強い有標性を物語っている。

### 尊敬態

最後に、日本語における尊敬態の存在を検討する。先に、自発態も含めてすべての非能動態は能動性の低さを共通の特徴として能動態と対比する、と述べた。まず自発態は、能動態とともに動態を構成する有意思の自発的行為（「泳ぐ」）、動態に属さない自然な変化（「咲く」）、有意思の能動的行為の結果としての変化（「壊れる」）、の3種類の事態をまとめた大きな類であるが、3つの下位態はこの順で能動性が低くなる。次に、自発態と境を接する可能態は、意思ではなく能力の発現（「泣ける」）によって事態が成立することを表す点で能動態の外側に位置する。受動態については言わずもがなとして、尊敬態は、これまた意思性の低さによって非能動態の連続につながる。

### 「になる」の受動性について

ここまで、議論のまとまりのために一語動詞を中心に扱って、態に関係すると思われる「てもらう」「てくれる」など複合動詞には言及しなかった。しかし、尊敬態の非能動性、非自発性を観察するために、「になる」と「する」についてのみ、ここで言及する。Makino (1979) は次の⑭-1で「になる」は強い受動性を表すと述べた。

- ⑭-1 太郎が [原文では「は」] 停学/仲間はずれになった (Makino: 24)
- ⑭-2 太郎が除名/転勤になった
- ⑮ 太郎が転勤/留学/\*停学/\*除名することになった
- ⑯ 太郎が出世/敗北/転勤/留学/\*停学/\*除名した

本稿では、「になる」は主体の力の及ばないところで物事が決まり主体がその決定に翻弄されることを表す、と考える。この点で⑭の類の「になる」は受動的な自発態とでも呼ぶべきである。ちなみに「春になる」「あの建物は学校になる」なども広く自発態に属する。

一方、「出世する」、「感動する」など、「する」は主体自身の努力、能力、運、感受性などによって事態が成立する場合に用いる。必ずしも有意思の行為とは限らない。有意思の行為である場合も、「〇〇することになる」として意思性を抑えることができる。このように、「になる」は主語の無意思性と受動性を表す。

注目すべきは、「になる」の用法が尊敬態の用法と並行することである。例を見よう。

- ⑰ 先生がお話しになる/先生が話される
- ⑱ 社長がお帰りになる/社長が帰られる
- ⑲ 部長がご転勤になる/部長が転勤される

先生が話すこと、社長が帰ること、部長が転勤すること、は実際には個人の行為であるが、個人を名指しして行為の由来を帰すことを避け、代わりに、そういう事態が出現した、と言うのが「になる」用法であり尊敬態である。「になる」用法では「(先生が話すという)事態が成る」として個人が従属節に埋め込まれる形で個性性を失い、尊敬態では受動態の形式を用いて行為主体の主体性が否定される。いずれの場合も、尊敬すべき人物は個人的性質をもたないもの、意思を発揮する有限の人というよりは発現した事態そのもの、と見られる。

### 態の諸相

まとめとして、日本語の態について次のことが言える。

- (i) 能動態は無標である
- (ii) 動態（能動態と自発態）は受動態と対比する
- (iii) 自発態は3つの下位類から成る
- (iv) 自発態・可能態・尊敬態・受動態は事態への非能動的参与のあり方を表す
- (v) 非常に有標な被害受動態と自発使役態の主語は各々、事態の間接的な被害者および使役者として事態に参加する

自発態は雑多な態である。有意思の動作主、無意思の対象、被動者、が自発態の主語として登場する。この自発態を3分割せずあえてひとくくりにし、一方で人か所属物かという観点を導入することで、被害受動と自発使役を統一的に説明することができた。自発態は無標の能動態に対しては有標であり、有標の非能動態グループの中では無標である。日本語は自発態がおもしろい。

### 英語と日本語の態

先に、英語の態は、誰が事態を成り立たせたか、という1事のみを表し、従って態の体系が単純であることを見た。これに対して日本語では誰が事態を成り立たせたか、というよりは参加者がその事態にどう関わったか、を多面的に表すことが観察できた。動作主と

して能動的に関わり事態を成り立たせたか、意思というよりは能力が発現したのか、あるいは成り行きであったか、被動者として関わったか、事態によって被害を受けたか、を表す。高位の使役者も有標な声を出す。これら全部が態として区別されるため、時に主語が省略されても動詞から逆算して主語が分かることが多い。

以上、態を、「動詞形態に反映される、事態への参加者の関わり方」と捉えることで、英語と日本語の態を対照的に観察することができた。

## 参考文献

- Comrie, Bernard. 1988. "Passive and Voice," in Shibatani, M (ed.), *Passive and Voice*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 9-23.
- Croft, William. 1990/2003. *Typology and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Dowty, David R. 1991. "Thematic Proto-roles and Argument Selection," in *Language* 67: 547-619.
- Fillmore, Charles. 1982. "Frame Semantics," in The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing Co., 111-137.
- Givon, Talmy. 1994. "The pragmatics of de-transitive voice: Functional and typological aspects of inversion," in Givon, T. (ed.), *Voice and Inversion*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 3-44.
- Hoshi, Hiroto. 1999. "Passives," in Tsujimura, Natsuko (ed.), *The Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford: Blackwell Publishers, Ltd, 191-235.
- Hyman, Larry M. 1975. *Phonology: theory and analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 岩淵 匡 2003. 『日本語文法』 白帝社.
- Jakobson, Roman. 1968. *Child Language, Aphasia, and Phonological Universals*. The Hague: Mouton & Co.
- Klaiman, M. H. "Affectedness and control: a typology of voice systems, in Shibatani, M (ed.), *Passive and Voice*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 26-83.
- Levin, Beth and Malka Rappaport. 1986. "The Formation of Adjectival Passives," in *Linguistic Inquiry* 17: 623-61.
- \_\_\_\_\_. 1991. *Grammatical voice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1994. "A preliminary analysis of causative verbs in English," in *Lingua* 92: 35-77.
- \_\_\_\_\_. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*, Vol. I. Cambridge: Cambridge University Press.
- Makino, Seiichi. 1979. "Contrastive Semantic Analysis and Teaching Japanese," in Harvey M. Taylor (ed.), *English & Japanese in Contrast*. Tokyo: Regents Publishing Company, Inc.,

19-30.

- 村木新次郎 1991/2000 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」 仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, 1-30.
- 柴谷方良 2002. 「言語類型論と対照研究」 生越直樹（編）『対照言語学』東京大学出版会, 11-48.
- Sohmiya, Kiyoko. 2004. “Verb Constructions in English and Japanese—A Contrastive Study on Semantic Principles—,” in Takagaki, T. et al. (eds.), *Corpus-Based Analyses on Sentence Structures*. UBLI, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies, 133-52.
- 宗宮喜代子・下地理則 2004. 「英語と日本語の「主語・目的語」構文について」『東京外国語大学論集』第 69 号, 1-25.
- Thompson, Chad. 1994. “Passives and inverse constructions,” in Givon, T. (ed.), *Voice and Inversion*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 47-63.
- Trubetzkoy, N. S. 1969/1971. *Principles of Phonology*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Washio, Ryuichi. 1995. *Interpreting Voice: A Case Study in Lexical Semantics*. Tokyo: Kaitakusha.
- 鷲尾龍一・三原健一 1997. 『ヴォイスとアスペクト』研究社出版.
- Wierzbicka, Anna. 1988. “The Japanese ‘adversative’ passive in a typological context,” in *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 257-92.